

特別  
~5  
6473





富於造序

下保倉村  
日所村  
青木用



富士拾遺序 自在菴 祇徳識  
 むし一之縣の亞お年多ううなりて  
 畧さ然りしははとにすは  
 う返る時より秋の月如傾くあら  
 比ひましく南窓をよとりしを  
 亦も里をてるるの管は志の事  
 既に往來乃く空物くははるま  
 然るやうはとつて後くおまら

多  
 多  
 多



之りひて字法推考とよまぬ  
正續二編也あふと一編と一花  
月如交真和とい一編ありを以  
一丁墨を以てり白にまて今又續  
編とあつ免か乃々よと一集と  
富士拾遺と名つく其中の撰考の  
三十六葉書者あ季甲斐に乃  
うらおとくをわくら撰者の胸中

よら一扱ううらに涌出らるる也  
志あるに編考の湖あり出考  
いよむじ海文とて三條のま川  
くく若く三種推考海士うら自ら  
物作より一門人のすく免る多るを  
やうく梓を嘉りて不朽とらん是ら  
為り一節をたし需免る海をたし





春富士

元日能く物まをん富士の山 宗温

東武に召れりし時

あふふ不二とんくまきく江戸の春 季吟

和川に富士の影をにけり哉 園指

春くも不二お家中やものむ 治徳

けりてや燈るものやを不二より 貞佐

徳角云々

横糸より石へ一富士たれさくらに 不角



中山三位殿御筆

侍所梅笑写之



東通る日ハ初使の物系師ハたそ  
海ももらりとくく山も結交知  
乃小まふと晴とほくらひまはり  
三つりのまはれまふとけふあ月一の  
用者るんとまきくくと尺面おそくハ  
いさしやのれ不二まや井の審人とんか  
仕合るる様よま合なり

富士浅尺ぬ奇人もあつむ花の山 嵐名

飛渡集

智者仁者の山水乃樂も心のつふふ

さうゆきこれくせはり花の吉野山くま

先の月みりゆの 富士名やま 貞室

いよのれ暗縁の新晴いふ都名



は二句ときくみ松並と角松と  
かゝるくちと風きよはうらふもまきと  
か

富士と昼を魚ハ武蔵井花の春 寒和

かたも小陽春らうや地獄の不二 尻狐

うつとり電を又訓うや妻の不二 魚木

時あゝ姫侍なまきもや妻此富士 佳節

聖の夜よ嬉々こ不二や維の侍 奴尺

臨廣の女あお常やとくら山 水府 沼橋

絶頂ハ少と志う嬉世う分 女薙

さるさ名の橋も白一花のみこ 梅巻

花咲く徳皇の言わぬ一の橋 終之

ふね

と川舟やおまの裾巾の小ねくく 水玉

片言きくくくのおおれくく 寧ろ

向うりの心いはいふふぬ吹く 印雲

あゝ月をたやれ葉らる飯 水玉

白竹もろは月のまき雲附 寧ろ

梧桐もろあゝ詩の魚ハ秋 印雲



家慶を侍へて居る所の事 全

遍く系傳のありあり 寧ろ

船の船了ふに船は極妙 水玉

花も花も花も花も花も花も 卯重

手拵れいよいよ様の子ん 寧ろ

あまのいよいよやぶ子之能 水玉

おろいといと管中へ如き也 卯重

子曰今侍りしをなむ 寧ろ

袖藏の結城も唐いふより 水玉

隙中しねふるに侍りし日 卯重

町人のまじりては〜花拵り 寧ろ

下巻の海舟のまじりては 水玉

孫めい〜まじりては〜雨あり 全

鮎魚の中ふ拵るも何屋 寧ろ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 卯重

孫人のまじりては〜あまの 水玉

志くわのまじりては〜門ぶら〜ん桶 寧ろ

悪〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 卯重







苗代わやーと汲込 甲子の浦

杜若唐 恭丸

ふりーと不二の雪や西行と

雪当

花さゆり馬さやもー一宵の香

晚牛

花もめもゆふやふーの香

全子足 玉樹

うーのゆきくもりぬこの心

坂戸 仙花

白き雪くーの香の香やうーの心

桃女

えりゆぬこいぬこのまはる

湖十

三孝やふりぬり後よの香、依々

花山やうーのふ不二の立寄 万尺

獨あゆもうふや 初日教 文尺

かきりふふふふふふふふふふ 香貞

神皇正統記 吾妻のふりや 南洲

其の世は富土はむー乃白地哉、秋路

作兄と不二の初れ 多枝 巴洲

比羅帯よかむ山遊一々富土 栢莖

白く枕く海あり不二の香をん 笛廷



をめくひんそや雲のまゝう町 泰延  
 のつ志りとけの胸や不二の山 文笑  
 まるつや藤巻よんや富士山 左竹  
 かくむや香はまゝにけく笑ひ不二 芦且  
 こもゆよ是も真やまの御一 羽人  
 武さー根い富士はさくれ梢は 硯素  
 おのけく縁の座や少の名 平川 百端  
 尺きて約不二の存盤やゆる尾 亭牛  
 さくし富士雲と帯の立はくこ 雪水

歌仙

淨出如や一帯と不二のま備 菜湯  
 星もあつとよ珠はく 河 窓和  
 風中張ハ風の勢を占ひく 度耕  
 或ま地の中は町をさす 祇徳  
 志ふくくと三日月影乃藤水 葉和  
 歌をてまのまゝての境系 菜湯  
 名利にふかす身まゝ不泥者号 紙恒



云橋ひらり、園境なり 庭耕

山々蒼々れよ、花輕井澤 菜湯

桐大霧、遠く馴こゝ 菜和

長珠粒のさひく、かゝ中柱 庭耕

細抄子もつ、即ちなきりく 祇座

半遊の秋と、去秋とく片あり 菜和

木戸も控、出さ角力場のみ 菜湯

宵月、緋色の霞、おほくよ 祇座

花火線、香も炎都より 菜和

蟻のくく、あそり集りも、やむ非 菜湯

岨の氣、水ハ馬、うけの穴 庭耕

十 笠棚よ、名宗う、わ川も、わ川も、せ 菜和

姉の美人、くさりや、ら返ら 祇座

能く、それハ、詩経ハ、みんか、まのす 庭耕

火 箕の水、乃ら、く、白、水、糸 菜湯

屋も、も、さ、く、さ、ぬ、き、れ、逆 祇座

灯、少く、文、取、紙、綴 菜和

城下、取つ、く、く、く、飛、伝、の、言 菜湯

十



伯父の字傑のときぞ鬼 庭耕

世よりまき 清も馬ハト一雨 夢之

櫛とまき ぬる日 河川も流れ 業湯

三夜前の書れあすまひ月のお 庭耕

あつてあつ—と葉のやる秋 祇仕

和着れ 明善照れと葉 錦 業湯

とふ 仙 孫より交れ何ぞ 夜と木

あつれより晴るや又時あつり 庭耕

ほなく 蘇ろく人と俗ろく 業湯

喉鐘了 おそれ 終ふか花見 祇仕

約し 尾長とわたり 祇仕 庭耕

富士浅間を宿言さす文あり  
——— 日本廿一山也  
勅額あり 近年 造管あり  
る紙六丈四尺あり あり

二重ふ入中一山 表多居 夕那 恐尺紙

不二はく 雲の 舞し 望也 隻 白抄



近ぶる小若るま切は製はる  
者巧まふ依此器を物ぬし  
路取しよその如し吾書一  
り人をもつあふことまかり  
初て富士と見付せる所を  
今見付るよりかすしるれは  
初富士と号くかの所をの何  
る一は遠くをいふれは

錦もふすれ山吹 不二

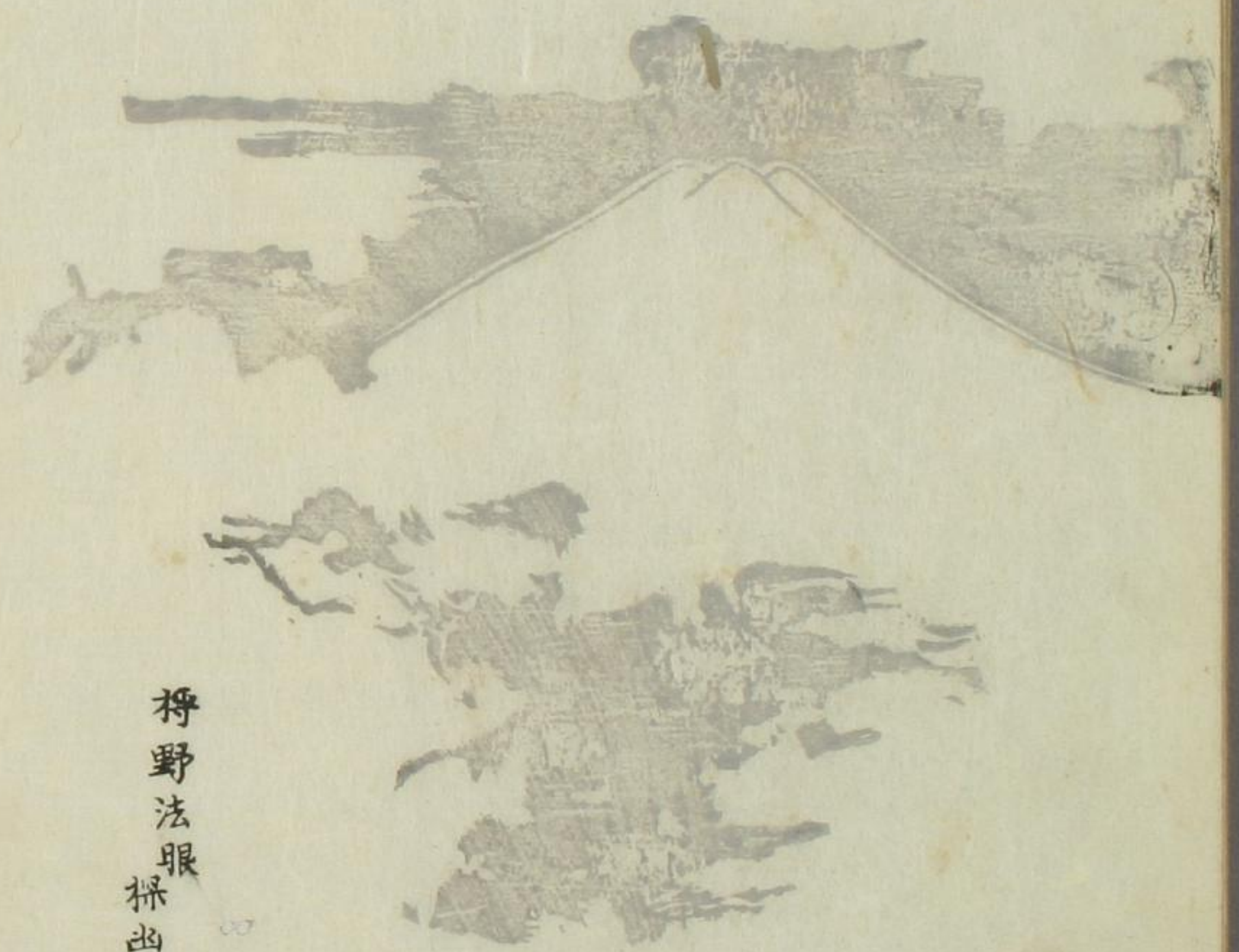
咫尺

不二

富士の山登り柔切のふゆひる  
遠世界みりの不二は河のん  
山菜草又のうけやまに不二  
六月やうらり富士うさくら  
暑ふりと却て清くや富士は雪  
富士指まぐさハヤシ海入あり

芭蕉  
素堂  
嵐名  
盲人  
立吟  
真因  
若菜  
宗益





樽野法眼  
採函志  
梅久守之

富士のついでに  
 今川家持の二の藤のついで  
 一人のついで  
 跡のついで  
 赤のついで  
 美のついで  
 志海のついで  
 又のついで  
 乃何のついで  
 音子  
 仙鶴  
 貞伝  
 沾洒  
 馬光  
 陸琳  
 育佐  
 新守  
 山口



夕陽はむせらぬ雨のふたはあ 東風  
 は涼しき雨の流すしきの峰 可圭  
 六月のふたはあむせの峰 和叶  
 けしきも〜涼も〜むせらん坂 水府 青里  
 攀の白れおこ〜ゆかひなかり 漲水  
 せ〜はのふたの上漕く三輪の水部 永芳退 みらむ  
 夕たさゆ〜り気なふたおぬ〜 宗梅  
藤のふたをぬかぬゆき  
 塩尻のふた〜しきむら〜敷を 律山  
 夏のふたお〜しき低〜ぬの心 祇貞

まくと富士さん〜ゆの暑さ外 山宇  
 水冬月や山〜つるるのねむり 魂書  
む〜男の〜の葉〜  
 六月もま〜ぬすり〜 暑れ不二 百右  
 不二、〜つ 役者ま〜つてお宝外 基業  
 あふ涼〜 湖口の不二と〜を春 以六  
 剛毛の暑さ〜 涼るわ〜 涼聚  
 多世月乃〜き〜おまぬ不二ゆり 宇尺  
 妻〜い〜うまぬ 就ろ不二と〜 柳隣



茂子吟や不二と違ふゆゑに  
一尺  
此の日の一日に  
吟之  
有る月れ不二に  
何江

甘欽仙

白面やまけもつら  
幽和  
亭と奈竹やまの小二階  
寒和  
あふの口く  
歌  
上下能く肩と  
文尺

城較も見古  
幽和  
御流屋箱の  
幽和  
を汁系女  
歌  
想いぬ  
幽和  
孫まれ  
幽和  
馬士と  
幽和  
真して  
幽和  
暇の虫物  
文尺  
扇く  
幽和











白由也信... 紀逸  
 ふじか... 田社  
 不... 丹志  
 青... 信彦  
 お... 凡舎  
や日の伝田子の浦  
 ぬ... 卯雲  
 卯... 付疎  
 ぬ... 沾山  
 む... 根後

秋富士

層... 素堂  
 秋... 卜尺  
 富... 貞角  
 少... 全  
 富... 珠言

園...  
 書...

寄...  
 何...



ふらふらとわたりてあつたころに  
そしゆる幸と災運の交わく  
明女作あり此人あり

深川やととてと不二と新けたり  
名月や富士と見ゆる先と諸河所  
冬

浮城

まづおよはすのあめよや秋の石二  
くくくくくくくくくくくくくく  
喜流

猪ヶ原の蘭のゆふや富士の山  
馬光

武陽の陣西より

金の字れりら秋の星より  
赤近

盆中やちとちとちとちとちとちとちとちと  
柳隣

えとよとちとちとちとちとちとちとちとちと  
五林

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
湖十

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
又洞

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
秋雨

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
六窓

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
故一

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
吾磨

名月やちとちとちとちとちとちとちとちと  
半窓





古法眼元信子  
梅峯写之

向ッてハハア子も好一帯此処  
 白雲如沼てハ様々秋乃富士  
 新菊のニ交好くまの背戸の不二  
 即ハ海如ハ眼く如秀れ如  
 秋のゆくゆくもゆくハハ富士  
 土乃好くゆくす帯々如秋の不二  
 階くくハ地と不二のゆみちう神  
 空曲ハ秋もももぬ 福如  
 不二目よはくくくぬ如月を  
 蓮谷  
 秀谷  
 仙菜  
 芦秋  
 上列各景  
 五語  
 小田永許  
 三由  
 柳下  
 白折

竹更



宿竹杖く初まわたり水のふこ  
 此更  
 思し、富士の裾のまはる  
 奈杯  
 富士をれく此より形一り山の月  
 幸壽  
 不二の香裾野海より毫田作  
 風尾  
 下しき下富士の如く如田子れ林  
 芝光  
 虫の言や吹さるる藤ぬ不二の裾  
 品川 盈枝  
 福書や不二下画し掃うし  
 菊呂  
 富士解さるの迹水や天の川  
 呂夏  
 名月の言ふは玉一不二の峰  
 六桂

秀仙

色之ぬあこれきる水色身乃松  
 梅川  
 ころにも居るまはれも何は  
 寧和  
 膝智の因に勢のな峰し  
 新口  
 互偏し一書まゆの秋  
 梅菊  
 抱く鬼の顔の月とたぐむこ  
 半雨  
 中  
 結もあゆむる花の如き  
 梅助  
 さゆいよ無人おすれは望み  
 寧和  
 結と出く程はまの日の  
 梅川  
 狎の枝ゆれまじり  
 梅菊



あつひのこゝろをたて細帯と裁

鶯口

泪のこぼれぬのりもくちまも

梅助

あつひのこゝろをたて細帯と裁

半雨

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅川

あつひのこゝろをたて細帯と裁

空衣

あつひのこゝろをたて細帯と裁

鶯口

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅助

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅菊

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅川

十

あつひのこゝろをたて細帯と裁

半雨

あつひのこゝろをたて細帯と裁

鶯口

あつひのこゝろをたて細帯と裁

空衣

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅助

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅川

あつひのこゝろをたて細帯と裁

半雨

あつひのこゝろをたて細帯と裁

鶯口

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅菊

あつひのこゝろをたて細帯と裁

梅助



日のはげと苗ふれは 寧ろ

陳中の紅も列しりりりり

十里月影かなうし色も 翁口

朱欄干渉ぬものゆは松より重 梅菊

さる藤の樹との眠る信る楽 梅川

少中か危一人乃しりりりり さら

留しかなる敷のあけら 梅菊

花さうりりりりりりりりりり 梅助

さる藤の樹との眠る信る楽 さら

冬富士

雪のふれ一折してくさる山 貞徳

雪けり 遊りたりやゆりの心 香頼

むしりやれるころりりりりりり 徳元

山のふれ三圍一朝しりのやま 香友

人形や雪月あらの富士の山 長由

雪のふれや珠粒と雪のふれ不二 文棟

富士の雪本降りるふれあしむか 香尾

わたりりりりりりりりりりり 母 智月







不二の峰もつとばもつと雪の足 樂歩  
 危人より亦ハ若れと雪は少 加好  
 源平雪は縁海やいとく富士 蟻道  
 綿つとれもや延るる冬の不二 旧乳  
 赤人の坂もうあくる雪の中 赤山  
 目も胸も腸も一富士れ雪 白峰  
 此のまより富士吹上れ雪より那 雪  
 約年のまよきんくは不二の嶽 弁河  
 登る大ハ雪より消てや雪の不二 一歩

ふた

高野め宝曆の雪はくくく 寥如  
 雪と現げく雪より外は梅 杖十  
 物始葉く雪影も白くはと雪の中 祇山  
 追る雪の影もいぬめり 杖十  
 南風は雪のすりにぬるる雪 祇山  
 雪は雪の雪の雪の雪の雪の雪 杖十  
 又ふくふく雪の雪の雪の雪の雪 全  
 雪を雪の雪の雪の雪の雪の雪 祇山  
 凡より雪の雪の雪の雪の雪の雪 杖十



孫のこゝろに聞かすは

寧和

揚幕の四つ笑ふ有卦のまの

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山

何事かこゝろに聞かすは

祇山

こゝろに聞かすは

祇山

折のこゝろに聞かすは

祇山

ひんがまのこゝろに聞かすは

祇山

口指のこゝろに聞かすは

祇山

判のこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

全

口指のこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

寧和

まのこゝろに聞かすは

祇山

まのこゝろに聞かすは

祇山



あゝ〜〜〜〜母の母

松十

い〜〜中野ももいの掃物

祇山

あゝあゝの村の疲いさ〜ぬ

松十

あゝあゝもま佛世界の安人

祇山

追まのんれ 右馬よりぬ

全

あゝ〜あゝ市をまきぬる花の君

松十

あゝ〜あゝ帯とぬ〜〜あゝあゝい

全

海〜あゝの海とぬ〜〜あゝあゝい

寧和

いち〜あゝな〜〜あゝあゝい

祇山

大雪の解てあゝあゝあゝあゝ

朱至

五六下あゝあゝあゝあゝ

右川  
元臨

田子あゝ〜あゝあゝあゝあゝ

治と

初あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

現妻

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

尺渡

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

忍也

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

忍也

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

仙葉

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

仙葉

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

管和



富士の松は風来はは玉の如と名ふるはれ  
 いひをねよ及みす者より名ふもいやとて  
 かく言れあはれとてこれとて詩まつり  
 ちのれいづきとて名はれとていふも  
 ねくも由井の松はまゆ三保の松乃ちの松とて  
 種いづちとていふもさうなほりれとて  
 ちのこもいづちとていふもさうなほりれとて  
 小まうはらうとていふもさうなほりれとて  
 いづちとていふもさうなほりれとて  
 りとていふもさうなほりれとて

雲白玉向不肖ゆ一のやう 三浦

すすり起れぬとていふも  
 中い松く丸とていふも  
 ぬこよとていふも  
 ふいふとていふも  
 雲とていふも  
 又雲とていふも  
 ふんとぬとていふも  
 白松とていふも  
 年とていふも

三浦  
 角呼  
 百屋  
 南林  
 万旭  
 風十  
 三松



宇土苗一編雜立する物なきを云ふ  
とれは又昔々よりハハハハ

なかりまむ宝に山むも高のそ花	梅川
隈母也ふこのよと路の約是	万嫁
おあしらの高きもあはれなる	宇尺
うしちちあさむあむのあ	川光
ま枯ゆふくくくくく	仙里
枯ゆふふふふふふの力う那	沾原
世の中れ雪のあ	、
わしとふこの	白桐
ふこの高きと	田女

星のや唐むらりぬ	のる	沾嫁
し雨	院花	品
物	辰舟	、
物	舟水	

田

富士	幸和
ふこの雪	
ゆ流と	
そり	



白母也はうゝゝゝの後の後  
柑雨

着うゝゝゝの後の後

柿の着うゝゝゝの後の後

打さうゝゝゝの後の後

富士のうゝゝゝの後の後  
忍草

あゝゝゝの後の後

あゝゝゝの後の後

あゝゝゝの後の後

白母也はうゝゝゝの後の後  
木匣二五子

あゝゝゝの後の後

秋風一帯川やのゝねうか

あゝゝゝの後の後

あゝゝゝの後の後  
千石二五子

あゝゝゝの後の後

あゝゝゝの後の後

あゝゝゝの後の後



東帯のまじり好し言せ喜めぬこ 路道

おーても次探幽ふらふのさ

鮎釣や唐くく白も富士の影

口ちち海鳥くくくおのさ

又ささのさささささささ 里路

一うらふ富士のささの清如水

多むむさささささささこのさ

お堆燈さるるこの結やと銭結

平心

白あーあさなあさささ

面白と求ふあさー白あな

あささささささささささ

の約さささささささささ

口ちのさされ福ぬーのさ 寥和

ささささささささささ

らあさるほささの果れ月ささ

独吟



那のうらもさるに降つ、  
木こりてさきさきとて謎もきく處の  
ゆせりり、海もさ海の大  
公姫のおもひて、あはれさきかあひ  
膝よこし、かき業よの馬  
角くく、さきさきさきさきさき  
大はなすのこころ、きかれ  
伯子もゆき、ゆきまひゆき  
さきさきさき、さきさきさき

裏のこい砂利場、あくさのさ  
さきさきさき、さきさきさき  
ゆきさき、ゆきさきさきさき  
ゆきさき、ゆきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき  
さきさき、さきさきさきさき



世の世の世の有るなり

後向く世の世の世の世の世

人完海路の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世

世の世の世の世の世の世



萬里招遺詔

萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔  
萬里招遺詔

萬里招遺詔

石二拾遺存宴九

石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九  
石二拾遺存宴九



如くなりて五世寺に於て絶つ

衣に中入りていふと傳へ

一物也但五世寺に五世の事也

達へ急ぐもかぬるる傳へ

寥和

とて伝へて傳へるる傳へ

樓川

芭蕉忌むる傳へるる傳へ

雞口

傳へるる名中兼五世の事也  
如横寺に傳へ

とて伝へて傳へるる傳へ

寥和

悼翁

け下りてか眠る人雪はとて

嵐雪

とて伝へて傳へるる傳へ

寥和

雪乃白く伝へるる傳へ

猪十

とて伝へて傳へるる傳へ

一人

とて伝へて傳へるる傳へ

田女

傳へて傳へるる傳へ

踏石

小便伝へるる傳へるる傳へ

橋川

とて伝へて傳へるる傳へ

海尺

文書伝へるる傳へるる傳へ

佳節

本傳傳へるる傳へるる傳へ

榮陽



秋小いとも別々ならしむる本枯乃  
りてさうさうと正定めなる事らむれ  
はれらる海客さうさう人あ一掃也  
も休奥山乃樹間のあうさうさうさう  
都りやう山は神間とむれらるる  
ぬくめん中ふ旅さうさうさうさう  
あうさうさうさうさうさうさう  
了らるる地利場とらりてりりり  
待客さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
甲令いさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう

海客は 諸客の君や されはら

寥和

めきき海客の地中して海客は  
総泉守り本魚中やうき橋場  
さうさう隅田川さうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
あうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう

素直乃改

何れも海客と枯れ候

寥和

又も埋せりて白雲乃中社  
あうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう



竹林乃奥よりものせらる埋蔵の地  
板敷の物々しき階をゆくかき  
くも独居し居るのまじりせよ

もよもよとつひとよき夜をこりり

紙徳

芭蕉もつたれかれ時馬もつた

と折せんて自製せられたる物を  
ゆきあはる志つらき宿にても牛  
丸茶酒平糶茶こめらの酒は  
して又境の山をふけいと川向  
つらつらと西湖乃とてつら  
ふも移人伝馬乃板敷の地を  
とつて日も傾けし暮る

さあやも山ちうさ白の入不

寥和

余仙

まう見一原去客ん初くは神

東風

ゆい小窓に閉ぬ夕くは

寥和

小原女よ飯袋や川に連尋し

楼川

刀くと笑ふは藤相

筆味

かお代を馬も輪舟の月

鶯口

鐘を撞のふと待たし

執事

瘦村くちりなると種木むく

筆和

他阿の草履もあは家かき

東風

おろいよはふらふ白と行りらさ

楼川



まにわんや碓り鶉

紀乃汝多れは保あふ乃卯ま垣

融板より糸織に猿

相くしうんは後照り星り

右結乃月小江樓乃笛

鳥築狐也無心之南らん

礫ありうんは根持乃果

右こり十度おき力と夜亦暖

強きに境の足をはめり

福引小末廣り乃傘片一

夜ハかのくとひり心殿

髪小物と伏巻ふ炬も世乃了

ほとけ乃御心も其何の大欠

形長の余りあつて可れ旅人達

塩漬くもれあらはれむき

はみ乃同ちあふよ神き月

ちりまれくもこら子みり子

いさめよ瘦骨ゆむ山折して



花乃名平あやむり	わたりつね	曉花むり	堪之	なご川	冬	花乃名平	い
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり
あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり	あやむり

又尊賊并飯

いし神田の基を平洗橋と申す  
 介也昌平橋と申す西巻のゆき改り  
 撫子也おふりともい田ら東の改れ  
 木の男は月史えいおの言根の言  
 言しその事其のむく僧は西巻  
 系人ら京島林一の橋は江戸の  
 備後と申す原松橋と申す  
 涼しくやうい母のこゝろにあはれ  
 婦乃の清けは赤松梅乃をよめ  
 くれ井乃をよめは白梅乃をよめ  
 藤乃をよめは物乃をよめはあはれ  
 鯛は仲こゝろはあはれの腹のいま



さういふ海鳥のやうな小ねのまゝに  
山鳥の聲の中へ鳴き下りて 雪の鳥声は  
ほろほろと松鳴乃紅のまゝと湖西の  
春乃暖といふ風成るらんを  
さきのうららかなるやうなまゝに  
ありては 穂下りて 雪近き處にて  
好色のまゝに 雪下りて

斗の年とて ちかき 悔いし

里高

四十の心若くは 見とら 乃雪

風雪

夏

塩炙けし 土の口ゆり 衣をえ

石中

鶺鴒をさす 唐帝の解るるふ  
蚊のまじりて 此のまじりて 土の口ゆり  
土の蚊也 雪中を人まじりにて 予  
よむに かくるは 赤虫也

春乃散やき 枯るの 柳の

或所方より 夏乃 歌 詠りて

さういふ海鳥のやうな小ねのまゝに

万立

夏から 柳乃 下りて

東風

神の心 陸子の 糸を 不ぬ

佳節







七百里の吟詠はくは傳説乃て其を  
くくはんしとてききしは深き其を乃  
其言はれは流しにひくくめふも  
くは一体和尚乃眼もかみみし  
難言れは佛も下跡も回し来り端  
仲るはゆきし一語もあはれは  
也活してきくも短くもあはれ  
一語も名あれは用ひられはし

詩に誦して樹をかくは女  
醉に一人をよき心教む  
夕半ちやあはれはあはれは

程祥

梅川

田女

卯月福舎に

山陰や福舎にそとて折  
卯節乃さくは低しはきん

新口

豊水

春 七言

元日や世訓を成るは日  
是餅 是餅 是餅 是餅

寧和

嵐若

梅賞ふてかきしはあはれ  
本町の節子乃さくはあはれ

寧和



釣位乃日物はみなり縮はるゝ  
年一一度あるもほに苦夏はるゝ  
せくあをこぬんサッとも首なみ 尻音

正徳乃いもれ物物像一なる付  
者白とくもれい

喉付くちる海きもや根乃花 百里  
福午也掛くて海在り仲の虹 沾洲  
折ふまは物さるればは福こも 乙由  
魚く見かきくれたり福乃也 乙由  
あかかれ花の物りも事なるい 乙由

み梅や花よりいふ存撰集 徑祥  
蝶いよりはぬいらも涅槃像 梅川  
凡さよくあふち梅乃あもはく 海尺  
亦さ口向ゆい一の事妹々癖 万立  
もも障子のけりよ蛇乃とくくは 白抄  
おりのもく鶴ふくこと桜外 筆和  
其乃約りさくはる房枝折れ 鶏口  
きく思わさるくはきる水のく 田女  
ふ花こふし系くはるきの月 夏笠



繫け蝶ねやまはるる柳 佳節  
 いふあぬ雑木の中けし蓮葉 祇面  
 お風よりや乃心乃やれさる 東風  
 かつらや唐も角もく彼岸りぬ 鳩光  
 仲不松のへ弘漕くそみず 荖陽  
 禮々〜海遠いよこ糸様 老水  
園城寺法皇のより地を寺行くとて  
 乙所乃編列とやゆりぬい  
 踏つていし樹たつてよもかろい 万平  
 きき糸乃梅り〜ひつ書つ〜 碧乃

新見及紅也松繻

何事上野入花ふふり〜む  
 佐例序ふふふまに〜あつれぬ  
 山王法ねんんとさふ〜ゆりら〜  
 秋也一漢百里もあふ〜〇て信  
 光りとも〜と書ゆ〜さ小物〜さ  
 なるが日なる少事さ〜海を  
 の〜さば〜や〜乃ものや〜けなる  
 不一市川国産市紅市村お柏加遊外  
 け〜る〜酒魚〜るふ〜松也  
 かつ〜入梅りは〜こけ松也  
 らせ〜ん〜土ま〜小松の〜高〜子  
か〜い〜

34-2







跡し一扇の断りて

焼はつはしるにちのめつるは

卦板も乃の傾城もさふ

の渡りて車ははしりきい

この糸持きゆくち内は陸

をまゝては海城のり帯は

隅く小舟のぬれ祀を

日小徳流りぬる上敷

糸也乃申小とてりる

二と度小丸ははしる目阿

末乃言くもえし心

門着也只乃すは思ひれは

さすてくはてはしる海城の

る川阿れはしる海城の

花ももくはる花たれ年

古いのまゝしるはるま

天上て下唯我独る

春湯及び斤集り鯉物



はらふふらふら石垣の目  
 七代子のあまの娘とあはれり  
 踏のめきれく鶴乃のほく  
 物重乃のうらまへおほ堂  
 高に代ふたゝる 吉屋  
 凡名あてふれりゆ拂ふ小商人  
 田舎乃感の抑産ぶ足好  
 森ありお花ゆりこはれお花  
 先水きよきにまはしる

秋

朝に渡く夕暮は 秋の海 旭和  
 武片一ゆりきりて日下おのり 和風  
 ち門下や田舎り海さす乃親 全  
 福丁や門田乃のふくはしる 友松  
 青分まきて雨も降るな秋乃虫 遠平  
 土意もあふたりま物お海はり 東風  
 さし朝も片一てかきぬ夢も書 白抄  
 早いとい月たふおふらあそく 空水



晩秋の歌

あぢなはら中よほりてぬいより

祇徳

人善く唐の都にゆく歸来より

踏石

の白も早もはたけにふまはたり

菱笠

みちちほりてはかたの帆立貝

舟如

の舟もと船もなほたけらるる物

吾水

思ひも九品にひも山日の光

零和

の運在る所のいふ事ある事

舞女もあはれにゆく舞の目も

猪十

葉のまはり中よほりてぬいより

佳節

樹も金もはたけにぬいよるる心

零和

ふにまはりてはかたの帆立貝

船口

の舟もと船もなほたけらるる物

祇祥

の白も早もはたけにふまはたり

祇聖

あぢなはら中よほりてぬいより

橋川

の舟もと船もなほたけらるる物

茶陽



日暮の里より宗廟法座の畔と  
中しれまを本有常任の月夜草  
不止りさうんまり中りも香若  
丹城のあまをともや勢州白子の名  
樹りまゝのりて本邦の才一株と植  
是れも随縁去如の和樂地神方佛  
哲言るゝめと

居續の石割著はくゝにまゝか

菜陽

菜陽亭ちうんは一挺不と  
まゝり流し今更又富士れ自公  
あつたをまゝふいあ一の人は  
不死のまゝと来しは山に入  
いよふまゝの地山の趣向を求め  
富士拾遺と外題し多情と



善いよりハ其一よよの  
此道よみよと  
不二の指つた像と  
事と咲一と

黒己無硯壽跋

寶曆四年甲戌秋八月

善いより  
青々々々



明治十九年八月

東  
我後國致我郡六日所也  
去月亦多事也



